

瑜伽行派における般若波羅蜜多と 無分別智との関係の一考察

Vo Thi Van Anh

0. はじめに

初期瑜伽行派の文献から般若波羅蜜多 (prajñāpāramitā) や無分別智 (nirvikalpajñāna) の概念が重要視されることはよく知られている。現在、同学派における無分別智についての先行研究は確認されるが、般若波羅蜜多⁽¹⁾についての研究は確認されない。後述するように、同学派の文献において、この両者は等置されている。その背景には、非常に複雑な思想的展開がある。その両者の関係を考察することは、瑜伽行派の般若波羅蜜多のみならず、無分別智の理解にも通じると考えられるが、瑜伽行派の無分別智に関する従来の研究ではそのような視点に着目されることはなかった。本研究は、その般若波羅蜜多と無分別智との関係を解明し、その上で両者の意味をも解明することを目的とする。ひいては、同学派における修行道論の編成の一端をもうかがいたい。

1. 無分別智と等置される般若波羅蜜多

まず、般若波羅蜜多が無分別智と等置することを明言するのは『摂大乘論』(Mahāyānasamgraha: MSg) である。同論の第IV章「悟入の因と果」第9節では、般若波羅蜜多の「品類差別」(prabheda) という項目において、般若波羅蜜多は三段階の智慧、すなわち①無分別加行慧 (*nirvikalpa-

prayoga-prajñā), ②無分別慧 (*nirvikalpa-prajñā), ③無分別後得慧 (*nirvikalpa-prṣṭhala-bdha-prajñā) であると規定されている。智慧に三段階があることは、同学派の文献である『解深密經』(Saṃdhinirmocana-sūtra: SNS) とそれを引用する『瑜伽論・摂決摂分』(Vinīścayasaṃgrahaṇī: ViSg), そして『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālaṃkāra: MSA) などにおける般若波羅蜜多の「品類差別」の項目にも見られる。しかしながら、これらの文献はいずれも①世俗〔諦〕を所縁とする慧, ②勝義〔諦〕を所縁とする慧, ③饒益有情を所縁とする慧を説き、MSg の三慧とは異なっている。特に、MSg において「無分別」の語が智慧の段階としての無分別加行慧・無分別慧・無分別後得慧という修行道論的術語として用いられていることはその特色だと言える。

MSg が般若波羅蜜多を無分別智と同一視することに関して、同論の三学(戒・心・慧)の一つ、第VIII章「増上慧学」(*adhiprajñā) 中にも確認できる。章の冒頭においては、増上慧が無分別智であることが説かれ、⁽⁴⁾「無分別智の伴侶」が「五波羅蜜多からなるもの」であると述べられ、その後、⁽⁵⁾「般若波羅蜜多と無分別智とは異ならない」と明言される。⁽⁶⁾つまり、「増上慧学」の章において、その主題となる無分別智は般若波羅蜜多と同義とされていることが確認できる。

瑜伽行派において般若波羅蜜多を無分別智として解釈する例は、ディグナーガの『般若經の要義』(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha) 冒頭第1偈にも見られる。⁽⁷⁾そこに説かれる無二智(advayaṃ jñānaṃ) という般若波羅蜜多の意味は、既に服部正明[1961]に指摘されたように、瑜伽行派の三性説を契機とする所取・能取を離れるという無分別智である。つまり、この論書においても般若波羅蜜多と無二智と無分別智とは同義として並記される。

要するに、瑜伽行派において般若波羅蜜多は無分別智として理解されていることが知られるのである。しかし、後述するように、同学派の初期文献である『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi: BBh) においては、この両者は必ずしも結びついていない。⁽⁸⁾その両者の関係は、学派の修行道論の整合性のために、

後に等置されるようになったのではないかとと思われる。

2. 初期文献における般若波羅蜜多の性質としての無分別

では、初期同学派の文献に説かれる般若波羅蜜多が無分別智とどのような関係にあるかを考察する。おそらく同学派において最初に般若波羅蜜多が詳説されるのは、BBh「慧品」(Prajñā-paṭala)である。他の「施品」などと同じく、この「慧品」では般若波羅蜜多を九項目に分けて説明する。すなわち①自性慧、②一切慧、③難行慧、④一切門慧、⑤善士慧、⑥一切種慧、⑦遂求慧、⑧此世他世樂慧、⑨清淨慧である。中でも無分別に関して、②一切慧の中、⁽⁹⁾「真如通達」の解釈項目において、智慧は「無分別」、「戲論を離れ」、「諸法において平等性を悟る」などと説明されている。管見の限り、「慧品」全体において無分別という語が言及されるのは、この箇所だけである。

一方、MSA では、無分別が般若波羅蜜多の性質として用いられる例は容易に見出される。例として、同論第XVI章「度摂品」(Pāramitādhikāra)中の波羅蜜多の「数」という項目において無分別は般若波羅蜜多の言い換えとして用いられる。⁽¹⁰⁾また特に、同品を総括する最終偈においてもこのような関係が確認できる。以下はその本偈及び世親釈である。

以上の如く、①常にその知が財物に執着せず、②③④静寂と制御と努力とを以て彼岸に往き、⑤自らを確立し、⑥存在と対境の因相に對して無分別 (bhavaviṣayanimittanirvikalpa) である彼は、衆生聚を摂受する者なのである。(XVI. 79)

この偈によつては、上述のような六波羅蜜多に住する菩薩が摂事の修習を示す。順次に諸波羅蜜多によつて、また諸摂事によつて、自と他の利益を成就するからである。⁽¹²⁾

ここに偈の「彼」が、世親釈において六波羅蜜多に住する菩薩であると説明され、⑥の「無分別」は般若波羅蜜多に相当することが理解される。さらにまた、「功德品」(Guṇādhikāra) XIX. 7⁽¹³⁾などの世親釈においてもこのような般若波羅蜜多の性質としての無分別がよく見られる。これらの内容からして、「無分別」が般若波羅蜜多の言い換えであることは明らかである。

要するに、初期瑜伽行派のBBhにおいて、「無分別」という語は般若波羅蜜多を説明する際に用いられてはいるが、般若波羅蜜多の特質を示しているとは言えない。一方、MSAでは、上述のように、無分別は般若波羅蜜多の特質として用いられていると言える。この点から、両文献の間に、般若波羅蜜多の解釈について大きく異なる点が見て取れ、前章を踏まえると、同学派の般若波羅蜜多と無分別智とを等置する関係は、MSAにおいて考察が深められていったのではないかと推測される。

それでは、なぜMSA以降の文献は般若波羅蜜多の説明において無分別を⁽¹⁴⁾重要視するのか。同学派の修行道において重要視されている無分別智に何らかの結びつきがあったのであろうか。また、一般に智慧(般若)とは、了別する・判別するという意味で用いられるが、般若波羅蜜多の性質としての無分別についてはどのように理解すべきか。この問題は同学派における無分別智にも関わるため、以下それについて検討する。

3. いわゆる無分別について

3.1 『瑜伽論』「声聞地」における修行により獲得した無分別

同学派の最初期における無分別の用例に関して、BBhの先行文献と考えられる同『瑜伽論』「声聞地」(Śrāvakabhūmi: ŚBh)内の「第二持瑜伽处」において、有分別影像・無分別影像・事辺際性・所作成弁という四種遍満所縁のうち、⁽¹⁵⁾無分別影像(nirvikalpa-pratibimba)は次のように説明される。

無分別の影像とは何か。つまり、ここでこの瑜伽者は、影像なる相を受

け取り、しかし観察せず、思忖せず、簡扼せず、尋思せず、思惟しない。そうせずに、その同じ所縁を捨てずに、止の行相によってその心を寂靜にする。それは、心を安住させる〔次の〕九つの行相によってである。つまり、心を内住させ、等住させ、安住させ、近住させ、調伏し、寂靜にし、息滅させ、一体にさせ、等持させる。その者にとって、その時に無分別（nirvikalpa）であるその影像が所縁である。その者が、一境の念を專注させるのが、所縁である。⁽¹⁶⁾〈後略〉

無分別影像は、影像を受け取るが、思考などはせず、その影像（所縁）も捨てずに、止の行相によって心を寂靜にする。つまり、ここに説かれる無分別は止修習の結果として理解される。⁽¹⁷⁾ŚBhの上述箇所の後、所作成弁という第四の遍満所縁の説示においても、この無分別の用語が説かれている。

この内で所作成弁とは何か。かの瑜伽者が止觀を熱心に行じ・よく行じ・多く行じることによって、影像を所縁とする〔行者の〕作意が完全なものとなる。そして、その〔作意が〕完全なものになることによって、依り所が転ずる（転依を得る）。そして、一切の龜重（惑）が消滅する。さらに依り所が転ずるから、影像を越えて、かの知られるべき事柄について、無分別な（nirvikalpa）現量なる知と見が生じる。⁽¹⁸⁾《後略》

この箇所の説示は、後の瑜伽行派の転依説や認識論の現量と関連するものとしてよく知られている。⁽¹⁹⁾先の無分別影像に見られる無分別は、止修習の結果として用いられ、この所作成弁においては、対象に対して生じる知・見の状態、止觀修習の結果として用いられる。修行の結果としての意味内容には、両者の間に共通点がある。従って、初期瑜伽行派における無分別は、修行によって到達する一つの認識のあり方を意味すると考えられる。

以上、無分別の語が同学派の初期文献に用いられていることを確認した。これは無分別の基本的な意味であるかもしれないが、その意味内容は後の同

学派における無分別智の無分別とかなり異なっている。その点を以下に検討する。

3.2 大乘化した瑜伽行派における修行により獲得した無分別

まず、同学派の大乘の立場を示した文献である BBh「真実義品」において、無分別という所知 (nirvikalpajñeya) と、勝義を対象領域とする無分別智として言及されている。池田道浩 [1999] で指摘されるように、無分別の智が対象を要するという点は、後に中観派の清弁によって批判されることとなる。⁽²¹⁾ BBh には無分別・無分別智の概念に関してはこれ以上の記述が見られないので、同文献のみで同学派の無分別智を理解することは困難であると池田論文も認めている。

実際、同学派において無分別・無分別智の語が頻繁に用いられるのは MSA である。BBh と比較すると非常に詳しく、同学派の無分別智の概念が集大成されていると言える。⁽²²⁾ 中でも、三性説を契機とする入無相方便に関わる同学派の無分別智の基本的な意味についての記述は、第 XIV 章第 23-29 偈で、いわゆる見道の修習内容において次のように説かれている。

その後そのようになった、〔三昧に〕集中した彼の菩薩は、意言を離れた、いかなる対象もみない。(XIV. 23)

法の光明を増大するために、心堅固に精進し始める。そして法の光明を増大することによって、唯心に位置する。(XIV. 24)

それ故、心において、一切の対象が顕われているのを見る。そのとき彼にとって、かの所取の散乱を捨てられる。(XIV. 25)

それ故、彼には、能取の散乱のみが残る。そしてそのときさらに、即座に、無間三昧に触れる。(XIV. 26)

なぜなら、その〔三昧の〕直後に能取の散乱が捨てられるからである。これらは順次に煖位などである、と知られるべきである。(XIV. 27)

その後彼は、二取を離れた、無上の、出世間の、無分別の (nirvi-

kalpa), 汚れを離れた智慧を獲得する。(XIV. 28)

それが、彼の転依であり初地である、と認められる。それ(転依)は、⁽²³⁾彼にとって、無量劫を経て、極めて清浄となる。(XIV. 29)

ここで注目したいのは、無分別の智の修習が所取・能取の二取に密接に関わる文脈であるという点である。すなわち、同学派の独自の止観修習、唯心説と結び付いた修行内容が説かれているのである。また、言及される文脈は瑜伽行者が順決択分という修行段階を経て、見道の階位、すなわち初歡喜地に到達するものであり、いわゆる大乘において修行によって到達した階位であると明示される。

要するに、前述の ŚBh における止観修習して得た無分別と、上のような二取を離れた無分別という文脈を比較すれば、前者に見られない二取の観想という点、また無分別智が獲得される初地・見道という点では、修行の内容も到達した階位も完全に異なっており、声聞の領域と、大乘菩薩の領域との記述の相違点が明らかである。このような無分別智は、思想的に発展した同学派の独自なものであると考えられ、後代まで継承されているものである。

しかしながら、上述の相違点は、あくまで声聞の記述と大乘の記述からである。修行道論の観点から見れば、上の MSA に説かれる無分別智の修行は、単に、以前に確立された修行内容を新たな要素で置き換えたものである。いずれも修行者の修習によって得られた結果を意味し、これは、両者の共通点である。

以上に述べたところは、修行者にとって無分別智は獲得されるべき目的を意味する。「無分別」は「智」を修飾する機能を持つので、獲得されるべき目的をも意味する。MSA に説かれる無分別についてさらにもう一つ注目したいのは、その無分別が行為の対象内容をとる点である。⁽²⁴⁾すなわち、無分別はある対象を「分別しない」という他動詞的なはたらきをもつ語として理解すべき用例があるということである。この点を以て、菩薩利他行の要素が同学派の無分別の概念に組み込まれていったと考えられる。以下はそれを検討

する。

3.3 仏陀・菩薩の行為としての無分別

MSA において、無分別が目的語をとる他動詞的なはたらきをもつ語として用いられる例が数多く見られる。その「分別しない」の対象は、人・法の自体、分別構想、行為主体・行為対象・行為そのものという三者などである。これらの用例によって、無分別は菩薩や仏陀の行為として示されている。そのうち特に最後の行為主体・行為対象・行為そのものの三者を分別しないことは三輪清浄と呼ばれ、この「分別しない」という無分別智の他動詞的なはたらきは、以下の引用の箇所において確認できる。

智 (jñāna) とは、無分別 (nirvikalpa) [智] であり、それによって三輪清浄なる布施を与える。施者と施物と受者とを分別しない (avikalpana) からである。⁽²⁷⁾

これは、XVI. 52 に説かれる波羅蜜多の功德無上の八義のうち、「智」について説明する箇所である。実際、同論に説かれる智や無分別智に対しての世親釈には三者を分別しないという三輪清浄に関連して説明される例が少なくないのである。⁽²⁸⁾ 要するに、MSA において三輪清浄の意味内容である三者を分別しないということは、無分別智のあり方として理解されるのである。このような三輪清浄と無分別智との関係は、同論の第 XV 章「業伴品」(Upāyasahitakarma) の第四偈においても確認できる。⁽²⁹⁾

常に無分別なる者 (sadāvikalpaḥ) は、三通りに、行為者、行為対象、行為のはたらきを見ない。従って、彼はその方便を把握せるが故に、その行為は無限であり、清浄なる彼岸に到達せるものである (XV 第四偈)。

この第四の偈頌によっては、行為者・行為対象・はたらきを認知しない

から、〔三〕輪清浄であるという点で、行為に関する清浄なる方便が示されている。「無限である」とは、不滅〔であるとの意味〕である。⁽³⁾

ここで、行為者・行為対象・行為のはたらきを「見ない」・「認知しない」の意味内容は「分別しない」という語の置き換えに他ならないであろう。その「見ない」、「認知しない」、「分別しない」という動作の主体は、無分別という状態に常に住している者（常に無分別なる者）であると述べられる。この者は、前に考察した同 MSA-XIV. 29 に説かれる初地・見道において無分別智を獲得した者、初地以降の菩薩を示しているとも理解される。つまり、「無分別」が目的語をとって他動詞的なはたらきの意味として用いられる場合には、それらの聖者の行為として理解されるのである。

3.4 小結

以上の3.1と3.2と3.3を踏まえると、同学派における無分別は二つの側面からなるものであると考えられる。一つは、それ自体で完結した自動詞的なはたらきをもつ語で、獲得すべき目的として用いられる、修行により獲得すべきものである。もう一つは、目的語をとって他動詞的なはたらきの意味として用いられる、仏陀・菩薩の働き、無分別智のあり方である。このうち、前者の獲得すべき目的の意味としての例は、ŚBh・BBh・MSA にも用いられる。一方、後者の目的語をとって他動詞的なはたらきの意味としての例は、ŚBh・BBh に見られなかったため、MSA の独自のものと理解される。後の瑜伽行派の文献における無分別智の概念から見れば、上のような無分別の二側面を併せて初めて同学派の無分別智の概念が完成されると考えられる。

ところで、この無分別の二点は更なる二つの観点からしても理解できる。すなわち、①修道の段階的には、到達すべき目的として示される無分別に到達してから、その者は「分別しない」という他動詞的なはたらきの意味で示される無分別の境地に進むことを意味する。②思想的には、止観修習によ

り到達すべきものという学派の従来思想を継承発展するものの上に、大乘經典の教学から伝わった菩薩行の要素を導入し、両者を整合させる作業をも意味する。それらのうち、後者(②)は学派の修行道論の編成を理解する一助となると考えられる。

4. 終わりに

以上検討したとおり、アサンガやディグナーガが般若波羅蜜多と無分別智とを等置する根拠に関して、直前に考察した、獲得すべき目的の意味として示される無分別と、目的語をとって他動詞的なはたらきの意味で示される無分別という二点、特に後者、すなわち菩薩の行為としての無分別は、般若波羅蜜多と同一視することの前段階であると推測される。

また、その無分別の二つの側面を通して、学派独自の修行道と大乘教学から伝わった菩薩行を合流させ、学派の新たな修行道論を完成する道筋がうかがえる。これは、般若波羅蜜多に言及する所に見られた、初期文献であるBBh「慧品」の記述と自派の思想が確立した弥勒論書であるMSAの記述との相違点と無関係とは思われないのである。

《略号及び参考文献》

- ASBh *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. Deciphered and edited by Nathmal Tatia, Patna: K.P. Jayaswal Research Institute, 1976. 早島理 (ed.) 2003 『梵藏漢対校E-TEXT 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』』 瑜伽行思想研究会 (所収)。
- BBh 『菩薩地』(Wo.): *Bodhisattvabhūmi*, a statement of whole course of the Bodhisattva (being fifteenth section of Yogācārabhūmi), edited by Unrai Wogihara, Tokyo, 1930-1931; (Dutt.): Nalinaksha Dutt: *Bodhisattvabhūmi*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1966 (Tibetan Sanskrit Works Series, 7)。
- MSA (MSABh 同) Sylvain Lévi (ed.): *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya*, Honoré Champion, Paris, 1907; rep. Rinsen Book, Tokyo, 1983; 長尾

- 雅人『大乘莊嚴經論』和訳と註解：長尾雅人研究ノート/長尾文庫編，京都。
- MSg 『撰大乘論本』(T1594.31無著造 玄奘訳)；長尾雅人『撰大乘論和訳と注解』上1982下1987，講談社，東京。
- SNS 『解深密經』(T0676.16玄奘訳)；(Lamotte.): *Samdhinirmocana Sūtra: L'explication des Mysteres by Etienne Lamotte*, Paris: Adrien Maisonneuve, 1935.
- ŚBh 『瑜伽論声聞地：サンスクリット語テキストと和訳—第II瑜伽処—』，大正大学総合佛教研究所声聞地研究会編，山喜房佛書林，2007。
- ViSg 『瑜伽師地論』「撰決撰分」D. 4038, P. 5039, T. 1579。
『般若經の要義』*prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha*, Erich Frauwallner (ed.) [1982] Kleine Schriften / herausgegeben von Gerhard Oberhammer und Ernst Steinkellner, Wiesbaden: F. Steiner. pp. 140-144.
- 池田道活
[1999] 「瑜伽行派における自性分別と無分別智」『駒澤短期大學佛教論集』5, pp. 252-238。
- 岩本明美
[2002] 『『大乘莊嚴經論』の修行道：第13・14章を中心として』京都大学博士号論文。
- 佐久間秀範
[2012] 『シリーズ大乘仏教7 唯識と瑜伽行』春秋社。
- 齋藤明
[1999] 「バーヴィヴェーカの勝義解釈とその思想史的背景」『論集』9, pp. 66-81。
- 高橋晃一
[2005] 『『菩薩地』『真實義品』から「撰決撰分中菩薩地」への思想展開—vastu概念を中心として—』Tokyo: The Sankibo Press。
- 内藤昭文
[2009] 『『大乘莊嚴經論』『菩提品』の講読：和訳と註解：付・梵藏漢和对照テキスト』永田文昌堂。
- 能仁正顕 (編)
[2013] 『『大乘莊嚴經論』第XVII章の和訳と注解：供養・師事・無量とくに悲無量』龍谷大学仏教文化研究叢書30，自照社。
- 服部正明
[1961] 「ディグナーガの般若經解釈」『大阪府立大学紀要 (人文科学)』9, pp. 119-136。

袴谷憲昭

[1985] 「唯識文献における無分別智」『駒澤大學佛教學部研究紀要』43号, pp. 252-215。

舟橋尚哉

[1984] 「大乘莊嚴經論の原典考—随修品と業伴品と（および教授品）を中心として—」『印佛研』33 (1), pp. 53-59。

Bhikkhu Hui-Min

[1994] 『声聞地における所縁の研究』Tokyo: The Sankibo Press.

矢板秀臣

[2005] 『仏教知識論の原典研究—瑜伽論因明, ダルモッタラティッパナカ, タルカラハスヤ—』成田山新勝寺。

若原雄昭

[2006] 「唯識派に於ける四攝事—大乘莊嚴經論第16章を中心に—」『日本仏教学会年報』72, pp. 119-139。

渡辺章悟

[1997] 「般若波羅蜜多 (prajñāpāramitā) の解釈」『東洋学論叢: 笠井貞教授退任記念号』Bulletin of Orientology 22, pp. 146-125。

註

- (1) 瑜伽行派の無分別智の研究については袴谷憲昭 [1985] 池田道浩 [1999] などが挙げられる。この中、前者は同学派における無分別智の規定の文献を紹介し、後者は「瑜伽行派における自性分別と無分別智」という題目で、中観派の視点からも検討している。しかし、瑜伽行派の無分別智についてこれまで十分な研究がなされていることが言いがたい。
- (2) rnam par mi rtog par sbyor ba dang / rnam par mi rtog pa dang / rnam par mi rtog paḥi rjes la thob paḥi shes rab po / [Nagao II. p. 77]
- (3) それらの諸経論に記述される般若波羅蜜多の「品類差別」項目の解釈は以下の表のように整理できる。

SNS.T676.16.705 c23-24	ViSg.T1579.30. 731b15-17	MSABh.XVI. 27-28	ASBh (O.Hayashima p. 673)
一者縁世俗諦慧 二者縁勝義諦慧 三者縁饒益有情慧	一者縁世俗諦慧 二者縁勝義諦慧 三者縁饒益有情慧	trividhā prajñā: 1. laukika 2. hīnalokottara 3. mahālokottara	prajñā 1. saṃvṛtyālaṃbanā 2. paramārthālaṃbanā 3. sattvārthālaṃbanā

- (4) lhag pa'i shes rab kyi khyad par ji ltar blta zhe na / rnam par mi rtog pa'i ye shes kyi ngo bo nyid dang / ... zab pa nyid kyi kyang rnam par mi rtog pa'i ye shes ni / lhag pa'i shes rab kyi khyad par du blta bar bya'o //

[Nagao.II.p. 92] 「高度の慧〔学〕の勝れた点を如何に見るべきか。無分別智について、『…中略…』〔それら〕によって無分別智こそは高度の慧学の勝れた点であることを知るべきである」

- (5) / byang chub sems dbaḥ rnam kyī shes /
 / rnam par rtog pa med pa'i grogs /
 / lam gnyis su ni brjod pa ste /
 / pha rol phyin lnga'i rang bzhin no / (VIII.9) [Nagao.II.p. 95, 同和訳 p. 269を参照]
- (6) shes rab kyī pha rol tu phyin pa dang / rnam par mi rtog pa'i ye shes ni khyad par med de / (VIII.21) [Nagao.II.p. 99, 同和訳 p. 287を参照]
- (7) prajñāpāramitā jñānam advayaṃ sā tathāgataḥ/
 sādhyā tādarthayayogena tacchabdyam granthamārgayoh//1//
 般若波羅蜜多は無二知である。それは如来であり、〔菩薩たちによって〕証得されるべきものである。〔然しまた、般若経の〕本文と〔無二知を証得する為に修習すべき〕道も、〔無二知と〕意義を同じくするので、〔般若波羅蜜多という〕同一語で言詮されるのである。(Frauwallner [1982] p. 140, 服部正明 [1961] 和訳)
- (8) この点は第二章に述べているものである。ただし、これらの般若波羅蜜多と無分別智の対象領域の観点からしてはBBh「真実義品」において全く関係ないわけではない。すなわち、同品の「菩薩の実踐行」(高橋晃一 [2005] テキスト「4.10」)における般若波羅蜜多の実踐では、「聡明者が、最高の真実を知る者である」(vicakṣaṇaś ca bhavati paramatattvajñāḥ)と説かれる。そして、注②のように、無分別智は勝義を対象領域とするものとして説かれている。つまり、両者が同様な対象内容を有することが確認される故、後の同学派において整合させられたと推測される。
- (9) ②一切慧の解釈には世間慧と出世間慧があると説かれ、さらにその直後に、
 (1) 真如通達 (2) 五明と三聚において決定善巧慧 (3) 有情利益という三つの意味も追加して説明している。
- (10) yā bodhisattvānām anabhilāpyaṃ dharmanairātmyam ārabhya satyāvabodhāya vā satyāvabodhakāle vā satyābhisambodhād vā ūrdhvaṃ⁽¹⁾ prajñā paramaprasaṃavyupasthānā⁽²⁾ nirvikalpā sarvaprapañcāpagatā⁽³⁾ sarvadharmeṣu samatānugatā mahāsāmānyalakṣaṇapraṇiṣṭā jñeyaparyantaḥ tagatā samāropāpavādāntadvayavivarjitā⁽⁴⁾ madhyamapratipadanusārīṇi / iyaṃ bodhisattvānām tattvānubodhaprativedhāya prajñā veditavyā / [BBh. Wo. p. 212.12-20; Dutt.p.146.11-22] ((1) : dutt:urddham; (2) : dutt:pratyupasthānā; (3) : dutt:…cāgatā; (4) : dutt:vivarjitatvān)
- (11) bhogeṣu cānabhiratis tivrā gurutā dvaye akheḍaś ca /

yogaś ca nirvikalpaḥ samastam idam uttamaṃ yānaṃ //XVI.5//また①資材を喜ぶことなく、②深く恭敬の念があり、③④二つのことにおいて倦み疲れることがなく、そして、⑤禪定があり、⑥無分別 (nirvikalpa) がある。これが上乘のすべてである。(XVI.5) [Lévi p.99, 長尾ノートIII p.13]

- (12) iti satatam asaktabhogabuddhiḥ śamayamanodyamapāraḥ sthitātmā/
bhavaviṣayanimittanirvikalpo bhavati sa satvagaṇasya saṃgrhītā //XVI.
79//

etena yathoktāsu śaṭsu pāramitāsu sthitasya bodhisattvasya saṃgrahavas-
tuprayogaṃ darśayati svaparārthasampādanāt pāramitābhiḥ saṃgra-
havastubhiḥ ca yathākramaṃ / [Lévi p.117, 長尾ノートIII p.100]。また、
この箇所を詳細に検討する先行研究に関しては若原雄昭 [2006] pp. 128-129
を参照。

- (13) MSA. XIX. 7では偈において「智は無分別である」といい、世親釈にはその
偈は波羅蜜多に関して説かれていると説明される。以下、世親が六波羅蜜多と
して解釈する偈頌を挙げておく。

①arthīṣv apakṣapātaś ca ②śilasyākhaṇḍanā dhruvaṃ /
③kṣāntiḥ sarvatra ④sarvārthaṃ vīryāraṃbho mahān api //XIX.6//
⑤dhyānaṃ ca kuśalaṃ nityaṃ ⑥prajñā caivāvikalpikā /
vijñeyā bodhisattvānāṃ tāsū eva samacittatā // XIX. 7 //
[Lévi p. 161, 長尾ノート IV p. 6]

- (14) 無分別という用語は般若経典などにおいてもしばしば説かれている。しかし
ながら、「無分別智」の語が見られない。また同経の無分別の概念は、MSA
のような、般若波羅蜜多の特殊な意味として言及されるとは言えない。般若経
典における般若波羅蜜多についての研究は渡邊章悟 [1997] などに詳しい。

- (15) この四種の遍満所縁は Bhikkhu Hui-Min [1994] p. ii によれば、瑜伽行派
独特のものである。

- (16) [-II-3-a-(1)-ii Ms.70a4L, Sh. 194-21, Sa. 6-4, W. 86-9, P. 91a4, D. 75
b5, N. 79b5, Co. 80b3, Ch. 427b15]: nirvikalpaṃ pratibimbaṃ katamat /
ihāyaṃ yogī pratibimbanimitam udgrhya na punar vipaśyati, vicinoti,
prativicinoti, parivitarkeyati, parimimāṃsām āpadyate / api tu tad evālam-
banam amukto śamathākāreṇa tac cittaṃ śamayati / yaduta navākārayā
cittasthityādhyātmam eva cittaṃ sthāpayati, saṃsthāpayati, avasth-
āpayati, upasthāpayati, damayati, śamayati, vyupaśamayati, ekotikaroti,
samādhatte / tasya tasmin samaye nirvikalpaṃ tat pratibimbam ālam-
baṇaṃ bhavati / yatrāsāv ekāṃśenaikāgrāṃ smṛtim avasthāpayati, tad
ālambanam / <後略> (テキスト及び和訳は声聞地研究会 II. pp. 44-46による)

- (17) 四種の遍満所縁の内、有分別影像は観修習に規定されている。このように無

分別と分別を止と観に規定することは、SNS「分別瑜伽品」(T0676.16.697 c24-25)においても同様である。

- (18) [-II-3-a-(1)-iv Ms. 70b1R, Sh. 196-12, Sa. 8-8, P. 92a1, D. 76a7, N. 80 b1, Co. 81a5, Ch. 427c8]: tatra kāryapariniṣpattiḥ katamā / yad asya yogina āsevanānvayād bhāvanānvayād bahulikārānvayāc chamath-avipaśyanāyā yaḥ pratibimbāmbano manaskāraḥ sa paripūryate / tatparipūryāś cāśrayaḥ parivartate / sarvadauṣṭhulyāni ca pratipraśrabhyante / āśrayaparivṛtteś ca pratibimbam atikramya tasminn eva jñeye vastuni nirvikalpaṃ pratyakṣaṃ jñānadarśanam utpadyate / (テキスト及び和訳は声聞地研究会 II. p. 48 による)

- (19) 転依説に関して、佐久間秀範 [2012] p. 36を参照。

現量に関して、文脈上において、それは無分別と共に知・見の形容詞として用いられている。このような現量は、認識論における pratyakṣa の規定 (Pramāṇasamuccaya-I.3cd:pratyakṣaṃ kalpanāpoḍham: 現量除分別) と類似しており、『声聞地』においてこのような現量と無分別との用例が他にも見られることが指摘されている。(矢板秀臣 [2005] p. 8 注②③を参照)

- (20) その二箇所のうち、前者は同品の「所知障浄化の知の活動領域」(jñeyāvaraṇaviśuddhijñānagocara [高橋晃一 [2005] テキスト2.2.4.2]) という項目において「無分別という所知」(nirvikalpajñeya) が説かれている。後者は増益・損減を離れた自性の存在を議論する箇所であり、以下にそれを引用しておく。(…〈前略〉…sa punaḥ pāramārthikaḥ svabhāvaḥ sarvadharmāṇāṃ nirvikalpasyaiva jñānasya gocaro veditavyaḥ // そして、それが一切諸法の勝義的自性であり、他ならぬ無分別智の対象領域であると理解すべきである [高橋晃一 [2005] テキスト5.1])。

- (21) 池田論文 (p. 247) は、清弁の瑜伽行派の円成実性を批判する文脈を引用する。なお清弁が、無分別智の対象ということに言及する際には、「対象のない仕方で」(yul med pa'i tshul gyis) 対象とすると説かれる。これに関しては齋藤明 [1999] pp. 72-73などに詳しい。

- (22) 同論に説かれる無分別は、本章で扱われるものの他、三性説のうちの円成実性の特徴として (XI.41), 転依した状態として (IX.42, XI.45), 大乘における菩薩・仏陀の優れた徳性 (XVII.65) などとして、数多く見られる。また、同論において、BBhに見られなかった無分別智とその後得智の二智 (IX.12; XIII.6; XIV.42; XVIII.61など) としても数回言及されている。

- (23) tataś cāsau tathābhūto bodhisattvaḥ samāhitaḥ /
manojalpād vinirmuktān sarvārthān na prapaśyati // XIV.23 //
dharmālokasya vṛddhyartham vīryam ārabhate dṛḍham /
dharmālokavivṛddhyā ca cittamātre 'vatiṣṭhate // XIV.24 //

sarvārthapratibhāsatvaṃ tataś citte prapaśyati /
 prahīno grāhyanikṣepas tadā tasya bhavaty asau // XIV.25 //
 tato grāhakavikṣepaḥ kevalo 'syāvaśiṣyate /
 ānantaryasamādhiṃ ca spṛśaty āśu tadā punaḥ // XIV.26 //
 yato grāhakavikṣepo hiyate tadanāmataram /
 jñeyāny uśmagatādīni etāni hi yathākramam // XIV.27 //
 dvayagrāhaviśamṣuktaṃ lokottaram anuttaram /
 nirvikalpaṃ malāpetam jñānam sa labhate tataḥ // XIV.28 //
 sāsyaśrayaparāvṛttiḥ prathamā bhūmir iṣyate /
 ameyaiś cāśya sā kalpaiḥ suviśuddhiṃ nigacchati // XIV.29 //

(テキスト校訂及び和訳は岩本明美 [2002] による)

- (24) 本稿において般若波羅蜜多と無分別智との関係という主題の下に考察するため、無分別智の無分別のみを考察するが、実際は、瑜伽行派において、上述の他、無分別というもの、すなわち、単独の名詞として用いられる例が存在する。それは MSA-XI.41 に示される円成実性の性質であり、BBh 「真実義品」 に示される「無分別という所知」(nirvikalpajñeya) の意味と類似するでもある。これについては別の機会に譲りたい。
- (25) XVIII.78c : śūnyatāsamādhir nirvikalpaḥ / pudgaladharmātmanor avikalpanāt / [Lévi. p. 148, 長尾ノート III. p. 278] 空性三昧は「無分別」である。人・法の自体を分別することはないからである。
- (26) paśyatām kalpanāmātram sarvam etad yathoditam /
 akalpabodhisatvānām prāptā bodhir nirucyate // IX.81 //
 kalpanāmātram tv etat sarvam iti paśyatām tasyāpi kalpanāmātrasyāvi-
 kalpanād akalpabodhisatvānām anutpattikadharmakṣāntilābhāvasthāyām
 arthataḥ prāptaiva bodhir ity ucyate //
- [テキスト校訂また和訳内藤昭文 [2009] pp. 130-131 を参照]
- (27) XVI.52: jñānam nirvikalpaṃ yena trimanḍalapariśuddhaṃ dānam
 dadāti dātṛdeyapratigrāhakāvikalpanāt / [Lévi. p. 112.3-4, 長尾ノート III.
 p. 75]
- (28) たとえば、MSA-XIII.29 菩薩が次第に無上の成就へと進むための方便である無分別の智の解釈する箇所、XVII.5 仏供養の功德無上の八義のうち智の解釈する箇所、XVII.8 最高供養のうち無分別智の解釈する箇所において数多く見られる。(岩本明美 [2002] pp. 225-227, 能仁正顕 [2013] p. 40, 同 p. 44 を参照)
- (29) 三輪清浄が MSA においては詳しく説かれている。一般に、三輪清浄は波羅蜜多説に関わることは知られているが、布施などの特定の波羅蜜多に限らず、この偈頌に示されるように、無分別なる者の行為という特徴に注目すべきであ

る。MSA における三輪清浄に関して岩本明美 [2002] 注(405), pp. 225-226 に論述される。

- (30) na karṁṇaṃ* karma na karmaṇaḥ kriyāṃ sadāvikalpaḥ samudikṣate tridhā/
tato 'sya tat karma viśuddhipāraḡaṃ bhavaty anantaṃ tad upāyaśaṃgrahāt // XV.5 //
anena ślokena caturthena viśuddhyupāyaṃ karmaṇo darśayati / maṇḍalāpariśuddhiṭaḥ kartṛkarmakriyāṇāṃ anupalambhāt / anantaṃ ity akṣayaṃ / [Lévi. p. 98, 長尾ノート III. p. 8] (*Lévi, 長尾ノートには karṁṇa であるが, 舟橋尚哉 [1984] で指摘されるように, 写本 (Ns79b1) には karṁṇaṃ である)。

キーワード 修行道論, 『撰大乘論』, 『般若波羅蜜多門集要義論』, 『菩薩地』「慧品」, 『大乘莊嚴經論』, 『声聞地』, prajñāpāramitā, nirvikalpajñāna, Mahāyānaśaṃgraha, Prajñāpāramitāpiṇḍārthashaṃgraha, Bodhisattvabhūmi, Prajñāpāṭala, Mahāyānasūtrālaṃkāra, Śrāvakabhūmi.